

# 守る。

自然いま 未来

冬でも二〇度を下回る  
ことのない阿嘉島の海。  
漁港に浮かぶ何の変哲も  
ない四枚のいかだで、サ  
ンゴにまつわる世界最先  
端の研究が続いている。  
いかにからロープでつ  
るしたかごの中に入っ  
ているのは、卵から成長し  
た稚サンゴが付着した基  
盤と、巻貝のタカセガイ  
イが数十匹。タカセガイ  
はサンゴを覆い成長を妨  
げる藻類を食べる。かご  
の網の目は小さく、魚は  
入れないため、食べられ  
る心配がない。

## 卵からの養殖研究

22

貝の助けて卵から稚サ  
ンゴを養殖しようという  
阿嘉島臨海研究所(大森  
信所長)の試みだ。  
稚サンゴは十月月で四  
ヶ月後の樹木状に成長  
し、海中に移植できる。将  
来的には、オニヒトデの  
被害などで荒廃している  
海にさんご礁を回復させ  
る可能性を秘めている。

■ 私財で運営される国内  
でも数少ない民間研究  
所。三人の研究者が常駐  
し、外部の研究者や企業  
関係者も利用でき、そこ  
で新たな成果が蓄積され  
る。人口約三百四十人の  
島にとっては存在感は際  
立っている。

■ 谷口洋基研究員(三も  
は、ダイビング協会のア  
ドバイサーを務め、事業  
者に調査方法や保全策を  
アドバイスする。サンゴ  
の学習に取り組む阿嘉幼  
小中学校の小学校にも指  
導に出向く。研究所の調  
査内容や島の自然をつづ  
る。

# 世界・地域に情報発信

第6部サンゴの里海 @慶良間



漁港に浮かぶいかだで、先端をいくサンゴ養殖の研究が続いている＝座間味村阿嘉島

■ 科学者だけでなく、地  
域との触れ合いも重要な  
研究所の役割だ。

■ 谷口洋基研究員(三も  
は、ダイビング協会のア  
ドバイサーを務め、事業  
者に調査方法や保全策を  
アドバイスする。サンゴ  
の学習に取り組む阿嘉幼  
小中学校の小学校にも指  
導に出向く。研究所の調  
査内容や島の自然をつづ  
る。

■ 「島で生活するために  
サンゴが必要で、サンゴ  
が生きるためにわれわ  
れの技術を使ってほし  
い。それが地元の研究所  
の価値です」。研究所に  
来て十年を越えた岩尾研  
二さん(三もは実感を込め  
る。

(社会部・澄川卓也)